

増山三雪子

しけりあふ木の間の月の涼しさに

秋かとはかりあやしまれけり

月下のピアノ

東くめ子

ぼらの香たかき 花そのゝ

わか葉のこかげ さまよへば

つきにうかれて かなづらん

ベーターフェンの ムンライト

そなたのまどに きこゆなり

ひと本野菊

つねを

千代の光りも おほ方に

知られぬ野菊 ひと本は

かわるに早さ 夕暮の

雨に怨みの 色みせて

さびしき野邊を いたはらぬ

よをあき風の つれなくて

かゝりし露も なにとなく

ひとりわはれの 物かもひ

瀧

瀧子

瀧といへば我日の本にては、那智の瀧、布引の瀧、

裏見の瀧、霧降の瀧などぞ大なる。されども、これ

らはおのれ見しことなれば、くはしきさまは得

知らず、只めでたき山水にてながめもすぐれたる

ことなど、ものゝふみにて知れるのみ。

小さけれども、おのれのいとも親しきは紀伊國海

草郡の山にある鳴瀧なり。この山の麓には一の小

さき寺あり。寺の後を通りて山道をわくれば、道

の左右には楓樹いと多く茂れり。瀧は高からねど

水かさいと多くて巾一間ばかりの谷の小川につ
きたり。水音いと高く、小川の流いとも清くて、
心もすむあたりなり。さて楓樹はこのあたりにも
多くて、晝なほ暗さばかりなるが、瀧つぼの上
枝さしねはひ谷川にかけのうつるなど、瀧の水と
紅葉と親しげなるいとめでたし。

一とせの夏、朝とくより一日のあつさをこの瀧に
さけたることあり、谷川はいと浅ければ、もすそ
かゝげてかちわたりし、瀧見堂といふにのぼる。
此堂は、前には瀧つぼあり、後には楓樹茂りて、
風いと涼しくはだへ冷なるまでにて夏を知らぬと
ころになん。けに夏は瀧のはとりにこそ、住むべ
かりけれ、とぞ思ひし
なるたきといふ名はなどてつきたる、其音物の鳴
るに似たればにや、人は秋のみ來れども、われは

夏こそ と思はるれば、なつたきとやいはまし、
と友の一人にいひつるに、ふつゝかなる名にもあ
るかな、と笑はれたりき

こよひあまりにあつくてたへがたければ、涼しき
こと思はんとするに、たちまち心にかびたるは
この瀧のことなり。文のよしあしをも思はで谷川
の如くはしりがくに、なにとなく涼しき風吹き來
るこゝちして身は瀧見堂にいゐるがごとし。

墓まうで

愛 子

けふは父君にわかれまつりてより、三とせ過し日
也。母君とともに御寺にものしつゝ、やがて父君
の御墓をわろかみまつらむとてゆく。そここゝい
と草ふかうわけかたかるに、こなたに一すちの道